反応

原　文江・登倉尋実・岡田守彦・大沢　済

第18回プリマーテス研究会（1974）

11）アカゲザルとマントヒヒの温熱性・代謝性反応

登倉尋実・原　文江・岡田守彦

日片文夫・大沢　済

第18回プリマーテス研究会（1974）

神経生理研究部門

久保田競・二木宏明・松波謙一

研究概要

1）前頭葉の機能の神経生理学的研究

久保田競・酒井正樹[1]

前頭葉のニューロン活動と遅延反応の関係の解析を続けており，心理部門小嶋祥三氏の参加で遅延反応を学習していく過程での前頭葉ニューロン活動の変容を追及し，サルが反応に 'attentive' になることで活動を増すニューロン群の存在が指摘された。

総説

1）久保田競(1974)：記憶の神経機構。自然(5月号)：54—61。

論文

1）Chase, M.H., M.B. Sterman, K. Kubota, and C.D. Clement (1973): Modulation of masseteric and digastric neural activity by stimulation of the dorsolateral cerebral cortex in the squirrel monkey. *Exp. Neurol.* 41: 277—289.

2）Conrad, B., K. Matsunami, J. Meyer-Lohmann, M. Wiesendanger and V.B. Brooks (1974): Cortical load compensation during voluntary elbow movements. *Brain Research* 71: 507—514.

報告その他

1）久保田競(1973)：顎運動への運動性皮質の関与について。顎口腔総合研究施設報告書，p. 42。

学会発表

1）腕の屈伸随意運動の時のGI求心力を受ける3a野ニューロンの活動について

弓矢治秀・久保田競・浅沼　広

第50回日本生理学会大会（1973）

2）サルの遅延反応時の visuokinetic neuron について

久保田競・鈴木寿夫

第50回日本生理学会大会（1973）

[1] 京大・理

3）光，てこ押し反応における前頭前野のニューロン活動

酒井正樹・F. Horvath

第50回日本生理学会大会（1973）

心理研究部門

室伏靖子・井深允子

浅野俊夫・小嶋祥三

研究概要

1）スプリット・ブレインにおける視覚情報伝達と反応決定の機構の研究[2]

室伏靖子・南雲純治[3]

切断脳ザルを用いて，反応時間を測定した結果，視覚刺激を与える半球と，手の運動支配の半球とが異なる場合，反応時間のばらつきは大きくなり，700～1,000msec. の長い反応時間帯に二つめの分布の山がみられた。これは，反応決定のプロセスに二つあること，すなわち半球間のコミュニケーションがうまくセットされた場合と，セットされないで信号検出に失敗した場合のあることを示唆している。

2）ニホンザル放飼群における環境変化と行動の変容

E. Tobach[4]・室伏靖子

海外との交流の項参照。

3）京都大学東南アジア研究センターの海外学術調査「熱帯アジア地域における自然環境と人間活動」に参加し，タイ国バンコク郊外の農村及び中部ジャワの農村において，環境と人間のかかわりあいを行動分析の立場から調査した。

浅野俊夫

4）記憶のメカニズム

井深允子

1．視覚的短期記憶の処理過程の行動的分析，遅延時間—再生率，刺激入力時間—再生率の検討

2．短期記憶の生理学的背景機構[5]，側頭葉の破壊実験によって，視覚的短期記憶に必須の部位の決定。下部側頭回の前部がこれにあたることを解明した。

5）前頭葉機能の研究[6]

小嶋祥三

遅延反応を行なっているサルの前頭前野からニューロン活動を記録し，この行動に前頭前野がいかに関係する

[2] 久保田競（神経生理研究部門）との共同研究。

[3] 文部技官

[4] アメリカ自然史博物館

[5] 久保田競，岩井栄一（都神経科学総合研）との共同研究。

[6] 久保田競との共同研究。

かを検討した。48年度は，遅延反応の学習段階とニューロン活動，また光刺激に反応し，バー押しに先行するニューロンの検討を行なった。

総　　説

1) 宝伏靖子(1973)：動物の"ことば"ーその行動的基礎。思想(8月号)：24—35。
2) 宝伏靖子(1974)：脳の二重活動。人間・この未知なるもの(4)。pp. 58—61。ダイヤモンド・タイム社。

学 会 発 表

1) 強化スケジュールの検討ー比率スケジュール
浅野俊夫
日本心理学会第37回大会 (1973)
2) ニホンザルの delayed matching to sample task における学習行動——遅延時間の関数として。
井深允子・長谷川康夫・岩原信九郎
日本動物心理学会第33回大会 (1973)
3) 遅延色合わせ課題における下部側頭回の部分破壊の影響
井深允子・久保田競・岩井栄一
日本心理学会第37回大会 (1973)
4) サルの自己刺激に関する研究——FR スケジュールでの反応パターン
小嶋祥三
日本心理学会第37回大会 (1973)

社会研究部門

川村俊蔵・河合雅雄
東　滋・鈴木　晃

研 究 概 要

1) ニホンザルの分布論的研究
川村俊蔵・東　滋

紀伊半島において，サルの分布を広域調査し，これまでの資料とあわせて，既知の分だけで 1,800km² 以上の連続分布域があることをつきとめ，さらに西へ連続することを推定した。そのほかいくつかの孤立した分布地がある。千葉徳爾共同研究員との協力のもとに，多角度からの分布論的な分析を行なっている。そのほか，鳥取県下における研究も行なった。

2) 野生ニホンザルの群れ社会の研究
1. 小豆島における経年変化の研究
川村俊蔵

小豆島を10年の空白の後に再調査し，さまざまなヒューマン　インパクトのもとで，群れがどのように変化し，行動域がかわったか否かを調べた。

2. 小豆島K群および滑床A群における性行動の研究
川村俊蔵

大島清を代表者とする霊長類の生殖生理に関する基礎的研究の一環として，上記の2つの群れについて，性行動の開始と終息の時期および個体間の性行動の頻度の推移について研究した。

3. ポピュレーション分布，および遊動と環境要因に関する研究
東　滋・足沢貞成[1]

4. 下北半島のニホンザルの社会生態学
東　滋

5. ニホンザルの個体群の維持・生活の維持におよぼす森林施業，その他の human impact の影響
東　滋

3，4，5については年報第3巻6頁参照。

3) 海外調査に関するもの
1. ゲラダヒヒの社会・生態学的研究[2]
河合雅雄・森梅代[3]

エチオピアのセミエン地区でゲラダヒヒの2ハード (105, 27) を個体識別し，精密な観察を行なった。ハードとワンメイルユニットの社会構造，社会関係（順位，グルーミング，血縁等），性関係，性行動，性周期，コミュニケーション，社会的成長，アクティビティー，遊動生活について，質的・量的な研究を行なった。また，ハード間の関係を4ハードについて調べ，ゲラダヒヒ社会の全貌を把握した。

2. アフリカにおける霊長類の生態学的研究
鈴木　晃

霊長類研究所特別事業の第2年度として，先年度に引き続き，昭和48年6月14日より昭和49年6月16日まで，ウガンダ・ケニヤ・タンザニアで霊長類の生態学的研究をおこなった。主としてウガンダのブドンゴの森において，チンパンジー，アビシニアコロブス，ブルーモンキー，アカオザル，サバンナモンキー，ヒヒの生態学的研究を行なった。

4) 自然保護に関する作業
川村俊蔵・東　滋

鈴鹿有料道路（継続），大峯山系および熊野地方，東中国山地において，自然保護に関する基礎調査ならびに意見具申を行なった。

5) 野生獣類の保護と農林業への被害防除の基礎的研究

---

[1] 教務補佐員
[2] 大沢秀行（生活史研究部門），岩木俊孝（九大・理）との共同研究。
[3] 教務職員